

夏休みの可能性

春日 潤一（博士前期課程人文学専攻2年）

「夏休みと読書」と言えば、私は高校三年の夏休みを思い出す。当時、インド・パキスタンの間で核実験をめぐる深刻な対立が起こっており、私はそのことについて何冊かの本を読んだのだ。なぜかと言えば、高校の「現代社会」の授業で二学期にプレゼンテーションをしなければならなかったからだ。部活の最後の大会に早々と負けてしまったこともあり、夏休みの後半は、図書館通いの日々となった。本を読みながら考えるなかで、私は核戦争が起きるかもしれないという脅威に僅かながらも慄然としたのを覚えている。そうした経験がひとつのきっかけとなり、「戦争はどうして起こるのだろうか?」とか、「戦争を起こす国家とか民族とは何なのか?」とか、「どうしたら戦争を解決することができるだろうか?」などと考えているうちに、こうして大学院まで来てしまった。ある意味で自分の人生を変えた夏休みだった。夏休みには、そんな可能性が秘められている。



学生になってからは、私は夏休みに日本中を旅行した。長崎、広島、栃木、群馬、山形、富山・・・と挙げればきりが無いが、その旅の途中、鈍行列車に揺られながら内容の濃密な、長編の書物に挑戦した。プラトンの『国家』、トルストイの『アンナ・カレーニナ』、『戦争と平和』などに、車窓を眺めつつ必死に挑んだのが懐かしい。別に膨大な量を読んだというわけではないのだが、そうやって目を白黒させながら夏休みに格闘した書物の一つ一つが、今の自分に何らかの影響を与えているのも確かだ。これは学生の特権だと思う。

だから、真夏の太陽がまぶしい白い砂浜で肌を焼き、夜空に散る一瞬の火花を眺めつつ涼む夏休みもいけれど、物悲しい蝸（ひぐらし）の音がこだます夕暮れ時の縁側で、書物を片手にひとり沈思黙考するこんな夏休みにしてみてもどうだろうか？

では、どんな本を読んだらいいのだろうか？今年の夏休みには是非とも読んでほしい本がある。『茶色の朝』（藤本一勇・訳、高橋哲哉・メッセージ、大月書店、2003年、1000円）という本だ。フランク・パブロフというフランス人が書いた物語の邦訳である。解説も含めてわずか47ページ、ヴィンセント・ギャロの挿絵が印象的な絵本のような本だ。しかしその本が秘めていた力は絶大だ。2002年の仏大統領選に出馬し、ユダヤ人排斥などの人種差別主義を鼓吹して支持を急速に拡大していた極右候補ルペンと、現大統領のシラクとの決選投票のまさにそのときにこの本は現れ、ルペンを落選に至らしめたのだ。内容はシンプル。ある日、茶色の猫以外は飼ってはならないという特別措置法ができる。白と黒の猫を飼っていた主人公は処分を迫られる。少し心は痛んだがしょうがないと納得する。続いて、特別措置法が拡大解釈され、犬、新聞、本が茶色でなければならなくなっていく。主人公は、その度毎におかしいと思いながらも、「あまり感傷的になっても仕方ないし」、「きっと心配性の俺がばかなんだ」と自分を納得させる。相変わらず、法律にさえ従っていれば快適な日常が保障されていた。ところが、大変なことが起こる。以前に茶色以外の猫を飼っていた者も処罰されるようになったのだ。「自分も逮捕される！」主人公はここで初めてはっとする。そして後悔し自問する。「いやだと言うべきだったんだ。抵抗すべきだったんだ。でも、どうやって？政府の動きはすばやかだったし、俺には仕事があるし、毎日やらなければならないこまごまとしたことも多い。他の人たちだって、ごたごたはごめんだから、おとなしくしていたんじゃないか？」と。

今年も8・6（広島に原爆が投下された日）、8・9（長崎に原爆が投下された日）、8・15（日本が太平洋戦争に敗戦した日）がめぐってくる。きっと、記念式典が行なわれ、甲子園では8月15日正午にみんな立って黙祷をするだろう。そしてテレビはそうした光景を映し出すだろう。そして私は今年も、「戦争はやっぱだめだ。絶対に戦争は起こしてはならない」と心に誓うのだろう。それ以外の時はさして考えてないくせに・・・。

そう、戦争を考える、反省するという行為は「年中行事」化してしまっているのだ。8月に日本人が行なう「一大行事」なのだ。これを「風化」と言うのだろう。このような時だからこそ、この本は豊かな示唆を与えてくれるだろう。そして、そこから思索の糸が四方へ伸び、次から次へと読みたい本が眼前に現れてくるに違いない。